

早稲田大学
図書館所蔵

『草庵和歌集』伝本の紹介

——新収資料十市遠忠筆本を中心に——

穴 井 潤

一 はじめに

この度、早稲田大学図書館に十市遠忠筆『草庵和歌集』（以下、『草庵集』と略称）が収蔵される運びとなった。同館にはすでに伊地知鐵男旧蔵本も所蔵されており、いずれも『草庵集』研究に欠かすことのできない重要伝本と考えられる。

『草庵集』は、南北朝期に二条為世門の和歌四天王と称された頼阿の自撰家集である。『草庵集』には正統二集があり、正集は四季・恋・雑・羈旅・哀傷・釈教・神祇・賀の部類歌集で、その成立は延文四年（一三五九）八月～同五年正月の間と推定される。

頼阿とその家集については、すでに多くの先行研究が積み上げられているが、特に『草庵集』伝本に関しては稲田利徳の網羅的な研究が存在する。^② 稲田論によると、和歌の有無や配列・詞書・歌本文の異同等によって、四類十九種に区分される。

また、書写者と目される十市遠忠は戦国時代の武将で、多くの歌書の書写者として著名な歌人である。^③ 遠忠筆本に

『早稲田大学図書館紀要』第六十六号（二〇一九年三月）

は稀本や善本が多く、新収『草庵集』もその伝本としての価値の高さが期待できる。

よって本稿では新収資料十市遠忠筆『草庵和歌集』を中心に二本の書誌を紹介し、その本文を検討することを目的とする。

二 伝本の紹介

ここに紹介するのは、早稲田大学図書館蔵『草庵和歌集』（請求記号へ48202）と、伊地知鐵男旧蔵早稲田大学図書館蔵『草庵和歌集』（文庫20-268）である（以下、前者を早大本、後者を伊地知文庫本と称呼）。それぞれの書誌を報告し、その特徴を述べる。

（1）早大本

縦二五・二糧、横一七・五糧の列帖装一帖。箱入。灰色微塵格子地表紙、同左上に題簽「右草庵和歌集中原遠忠筆」（本文とは別筆）。見返しは本文共紙。内題「草庵和歌集」。料紙は楮紙、墨付一四二丁（遊紙前一丁、後二丁）、一面一一行、和歌一首一行書き。天文元年（一五三二）十月四日写。

該本最大の特徴は、

〔A〕當殿御筆 近衛殿竊視此集之緝編可謂和歌之規範歟意氣／於萬象之中垂風軀於千載之後誠是此道／之遺美也豈不斯

文在茲乎不足嗟嘆聊吟／情性而已／としへぬる和哥のうら人／みかけはそあつむる／たまのかすつもる／らむ

〔B〕本云文明十六甲辰年卯月廿八日書写功訖 此一冊者／先年殿中炎上之刻令紛失之間以藤民部／又三郎本部恋二階堂判

官政行部本等写之刻／校合訖

早稲田大学
図書館所蔵 『草庵和歌集』 伝本の紹介

〔C〕右一冊者以三善之連自筆⁽⁴⁾并或本等令書写之／同加校合畢／于時天文元年拾月四日／兵部少輔中原遠忠との奥書を有する点にある〔図版1〕〔図版2〕参照。

〔A〕は稲田が「近衛殿御書」と称し、「年経ぬる」歌と共に第一類に共通する識語と認定したもの。版本刊記の前に存することから、この識語を持つ伝本が版本系の祖本と考えられてきた。書写年次が記されていないため「當殿」が近衛某であるかは不明だが、二階堂政行所持本（後述）の親本が近衛家の写本であった可能性を窺わせる。

「此道之遺美也」と記すことから頼阿没後と考えられ、文明年間までの近衛家当主である近衛道嗣・兼嗣・忠嗣・房嗣・政家のうちの誰かが識語と歌を記した「近衛殿」ということになるか。「當殿御筆 近衛殿」と記したのが〔B〕奥書の筆者（あるいは親本所持者の二階堂政行）とするならば、文正元年（一四六六）に自邸の書物を戦火から逃がし、文化人・能書家としても名高かった近衛政家が可能性の高い人物として挙げられよう。⁽⁵⁾

現存する室町期写本で「近衛殿御書」「年経ぬる」歌を有する伝本は早大本のみであり、この識語を有する伝本中最古写本といえる。〔B〕に記される二階堂政行所持本ないしその祖本は版本系の祖本と共通する可能性が存する。

〔B〕は本奥書で、文明十六年（一四八四）四月二十八日に書写したと記される。「先年殿中炎上之刻令紛失」とは文明八年十一月十三日に室町殿が焼亡し、その際「御記抄物」が悉く焼失してしまったことを指す。⁽⁶⁾

文明十五年から將軍足利義尚は私撰集編纂のために精力的に私家集蒐集を行っており、火災によって焼失した『草庵集』を近臣が所持していた伝本によって復元しようとしたものが早大本の祖本と考えてよい。⁽⁷⁾

「藤民部又三郎」は義尚の走衆を勤めた藤民部又三郎政盛、「二階堂判官政行」は評定衆であり義尚の側近である二階堂政行を指す。

二階堂政行は武家故実に通じ、文書・歌書を多く所持していたことで知られる。⁽⁸⁾ 義尚主催の和歌会においても度々

常安
 亦編現法集之譯編下端和行、就乾教原氣
 然萬象之中、要同悟於千載、後放是道
 之道義、豈不利交在茲乎、不足嗟嘆聊吟
 情性而已
 也、
 又、
 今月廿二日、
 乙未年
 天明上巳辰巳卯月八旦書寫訖 此二冊
 先年殿中著上、刻令紛失、同、藤原邦
 入之本、經二階直則成、乃、兼平寺官、刻
 孫會範

右一冊著人三長遠自書
同治庚午年
高士公元年 陰月 廿四日
書於補中序書處

— 55 —

右筆を務めており、自身も多く和歌を詠んでいる。

藤民部政盛は將軍の直轄軍である奉公衆の一員で、義尚が六角高頼征伐のために近江に出陣した際にもしたがっていたことが知られる。⁽⁹⁾政盛その人についての詳細は不明だが、奉公衆が東山文化の担い手となっていたとの指摘があり、⁽¹⁰⁾政盛も和歌・連歌に対して教養を有していたと推測する。

政盛からは恋部を、政行からは雑部を借り受けたと記されるが、四季部の素性については不明とせざるを得ない。^(B)によって、早大本は祖本の段階で取り合わせ本となっていると判断する。

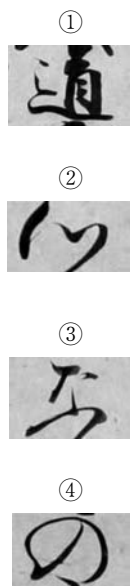
^(C)を見ていく。「三善之連自筆并或本等」とあり、三善之連の書写した本と詳細不明の「或本」などによって書写・校合を行ったのが早大本と記す。鶴見大学図書館所蔵『堀河院艶書合』にも

右此一帖自榮暁法師相伝之畢／三善之連筆跡也／天文七年林鐘中四／兵部少輔中原遠忠⁽¹¹⁾
という奥書が残されており、同じく三善之連が書写した本を手にしている。早大本の方が先立つが、恐らく同様の経路で伝本を入手したと考えられよう。⁽¹²⁾

また、「加校合畢」と記されるように、本文同筆と思しき異本注記が見られる。系統区分に関わる注記であり、「或本等」が三善之連書写本とは異なる系統の本文を有していたと推察される。

筆者は「兵部少輔中原遠忠」と記される。

【図】早大本に見える遠忠筆の書体の例



遠忠筆の特徴的な筆致が確認できる箇所を任意に摘出したのが右掲図である。

①「道」の「え」が内側に深く切り込んでいる

②「心」が「川」の草体に似た形で書かれる

③「な」の上向きに筆を返すところを横一文字に書く

④「の」の上向きに筆を返すところで内側に少し戻る⁽¹⁴⁾

など遠忠筆の有する書体と類似した傾向が看取されることから、早大本もまた遠忠筆本と認定できよう。

〔B〕・〔C〕いずれも早大本独自の奥書である。〔B〕から文明補充本の中に『草庵集』が含まれていたことを、〔C〕から遠忠の蒐集した家集であることを確認できる。

(2) 伊地知文庫本

縦二六・五糧、横二一・〇糧の袋綴（五つ目綴）二冊。打雲表紙、左上に題簽「草庵和歌集」。見返しは本文共紙（二冊目後表紙欠）。内題「草庵和歌集」。料紙は楮紙（裏打有）、墨付三五丁（上册）・三七丁（下冊）、一面一二行、和歌一首一行書き。書写年代は不明。本奥書に「応永七年春比」とあり、それ以後。卷六（冬部）までの残欠本（上册が卷一

早稲田大学
図書館所蔵『草庵和歌集』伝本の紹介

（三、下冊が卷四～六を収める）。

該本については、すでに稲田が簡潔に調査報告を行っているため、その驥尾に付して概観する。⁽¹⁵⁾ 本奥書が上・下冊それぞれに付され、

上冊 本云応永七年春比以頼阿自筆正本忝申請／門主御筆令写之畢／三井持助之

下冊 本云応永七年春比以頼阿自筆正本／書写之校勘畢／三井持助之

と記される。稲田はいずれも転写奥書とし、書写年代は室町末期ごろかと推測している。

上冊の奥書に拠れば、「三井持助」が申請して「頼阿自筆正本」を「門主御筆」にて書写したものとす。「三井持助」「門主」のいずれも人物の特定が出来ておらず、「頼阿自筆」についても確認する手立てがないが、稲田が「古い本文の姿を伝える貴重な伝本」と述べるように、その本文は古態を残していると考えられる。本文中には別筆で注が付されており、「三井持助」以後の所蔵者も校合を行ったか（図版3）⁽¹⁶⁾ 参照。

また、下冊の奥書後に本文とは別筆で五首の和歌が記されている。

萩風正撤

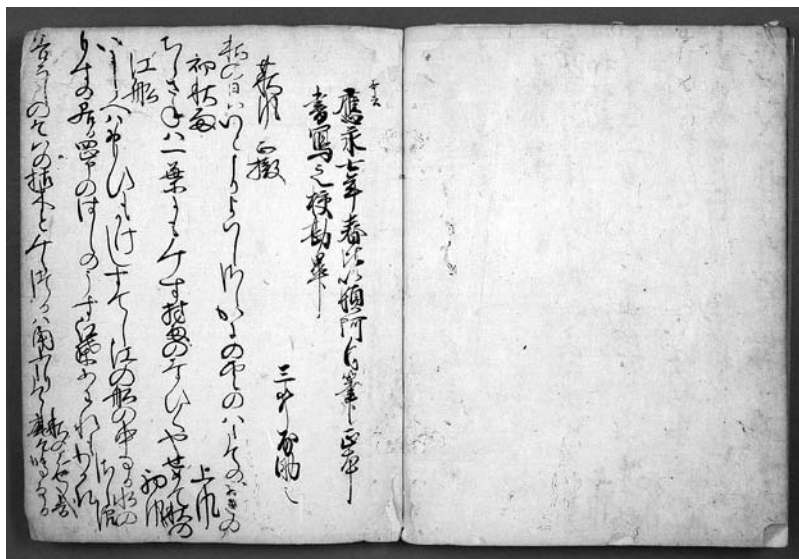
秋の日はいとよりよはしさ、かにの雲のはたてのおきの上風

初秋雨

ちらさねは一葉にもみす村雨のなひくやせめて秋の初風

江船

いにしへはおもひもかけしみの江の船の中なる水のさし□
もすの居る岡部のはしのうす紅葉あわれもわかす秋のかせ哉



早稲田大学
図書館所蔵 『草庵和歌集』 伝本の紹介

【図版3】 下冊 奥書

谷□しのそはの枯木とみえつるは角ふりたて、鹿ぞ鳴なる

右掲五首は全て新編国歌大観・新編私家集大成に見えない
出典未詳歌である。頓阿詠ではなく伊地知文庫本を所持し
ていた人物が付与したか。

三 伝本の系統

冒頭で述べたように、『草庵集』は稲田によって四類十
九種に区分されている。

第一類は六種に分かれ、版本系で比較初編本の形態を
伝えている。巻末に「近衛殿御書」を有することが特徴。
第二類は二種に分かれ、古態を残しているが独自の脱文が
見られる。第三類は九種に分かれ、詞書の追補・整備が行
われ配列も整理されているなど再編本かと推定されている。
第四類は三種に分かれ、いわゆる「鼈頭草庵集」と称され
る系統。第一類と第三類の混態本文と目される。

稲田は四類十九種を区分するために、Ⅰ和歌の有無、Ⅱ
詞書中の人物名表記、Ⅲ詞書の情報の有無、Ⅳ配列の異同、

V歌本文の異同、の五つの判別基準を設けている。左掲表は早大本を稲田の区分に当てはめた際の一覧表である。

【表1】 早大本の系統区分基準一覧

V	IV	III	II	I	
○	×	×	○	○	①
×	○	○	○	○	②
○	○	○	×	○	③
×	×	○	○	○	④
○	×	○	△	○	⑤
×	○	○	×	×	⑥
○	○	○	△	○	⑦
○	×	×	△	○	⑧
○	○	×	△	○	⑨
△	○	×	△	○	⑩
○	○	×		○	⑪
○	△	×		×	⑫
×	○	×		○	⑬
○	○	×		×	⑭
○	○	×		×	⑮
×		○		○	⑯
○		×		○	⑰
○				○	⑱
×				○	⑲
○				○	⑳
△				○	㉑
○				○	㉒
×				○	㉓
×				○	㉔
×	○	㉕			

V	IV	III	II	I	
○				○	㉖
△				○	㉗
×				○	㉘
○				○	㉙
×				○	㉚
△				○	㉛
×					㉜
×					㉝
△					㉞
○					㉟
△					㊱
○					㊲
○					㊳
×					㊴
○					㊵
○					㊶
×					㊷
○					㊸
×					㊹
○					㊺
×					㊻
○					㊼
×					㊽
×					㊾

右表の区分基準を含む系統区分の詳細は稲田論を参照されたい。ここでは早大本の系統を判断するために重要な箇所のみ考察する。

早大本の本文は、売立目録では第三類一種の東奥義塾図書館本（以下、東奥本）に最も近いが、細かい系統区分が困難とされる。¹⁶ また、稲田が第一類に区分する根拠とした「近衛殿御書」「年経ぬる」歌（Ⅰ³⁰Ⅲ³¹）を有するため、第三類であるか否かも判然としない。よってⅠ～Ⅴの基準によつて早大本がどの系統に近しいかを調査する。

Ⅰに関しては、「近衛殿御書」「年経ぬる」歌をのぞき東奥本とほぼ一致する（Ⅰ¹⁵のみ異なる）。Ⅰ¹⁵が欠けるのは第二類・第三類三種にのみ見られる傾向で、その意味では第三類に近い。

Ⅱは春上部に限った分類基準で、第一類とほぼ一致する（Ⅱ¹Ⅱ²が異なる）。稲田はⅡ¹Ⅱ³Ⅱ⁶が欠けているか補充されているという点が第一類の共通項と論じており、Ⅱ¹が記されているのは第三類・第四類の特徴とする。

ただし、稲田が春上部において二条為世を「二条入道大納言」表記で統一しているのが第三類で、「前藤大納言」表記が混在しているのが第一類と推定している点から、Ⅱ⁷～Ⅱ¹⁰で「前藤大納言」表記がある早大本は第一類に近い。Ⅱ²足利尊氏を「等持院贈左大臣」表記で統一するのは第三類の特徴であり、異本注記で「將軍家」と記しているのは不審。

Ⅲは、ほぼ全てが東奥本と一致する（Ⅲ¹のみ異なる）。Ⅲ⁸～Ⅲ¹⁵・Ⅲ¹⁷は第一類と第二・第三類で分かれるところで、早大本は第三類と近い詞書と考えられる。

Ⅳも、最も一致率が高いのは東奥本である（Ⅳ¹Ⅳ⁵Ⅳ¹²が異なる）。Ⅳ¹Ⅳ⁵は第一・二類と一致するが、Ⅳ²Ⅳ³・Ⅳ¹⁴までは第二・第三類と一致する傾向にある。ただしⅣ⁷～Ⅳ⁹に見える第二類独自の配列は早大本には見えず、二類とも異なる。

配列において東奥本とともに注目されるのは、第一類四種の静嘉堂文庫本（室町中期写）である。該本は秋下部までの残欠本だが、秋上部までは早大本と完全に一致する（Ⅳ¹²Ⅳ¹³が異なる）。静嘉堂文庫本は独自の特徴を多く有する

ため、これをもって早大本は第一類と近いとは言いかねるが、少なくとも第三類と異なる部分があることが知られる。なお、静嘉堂文庫本とはⅠ・Ⅱにおいても一致率が高い点も注意される。

Vは第三類一・二種（東奥本、陽明文庫A本）が最も近いが、第一類三種（豊橋市立図書館本）・第二類一種（内閣文庫本）・第三類三種（福田秀一本）も同程度一致する。V③は第三類九種（龍門文庫本）のみに見える本文だが、「そ」「に」の字体の近似による誤写だろうと考えられる。

ⅠⅢⅣVから、最も本文が一致するのは東奥本である。その一方で、Ⅱは第一類全般と、Ⅳは第一類四種（静嘉堂文庫本）と、Vは第一類三種（豊橋市立図書館本）と一致率が高く、「近衛殿御書」「年経ぬる」歌と同様第一類の特徴も有する。以上より、最も近いのは第三類一種、次いで第一類四種と考えられる。ただし、従来の基準では系統の区分は困難である。

つづいて伊地知文庫本を見ていく。早大本と同じくⅠⅢVを左掲表（次頁）にまとめた。すでに伊地知文庫本については稲田が調査報告を行っており、

他に全く同一の伝本はないが、第一類の版本系統ではないこと、およそ第三類系統の二、三あたりに近く、それに第二類系統の本文も備えているといえよう。

と結論づける。

Ⅰは第三類に近いが、Ⅰ⑧が×なのは第二類の特徴である。また、Ⅰ⑫⑭⑮が×なのは第二類一種の内閣文庫本のみで、第二類との接触が疑われる。

Ⅱは第三類二種（陽明文庫A本）と完全に一致する。

Ⅲは、Ⅲ①Ⅲ⑤までは第三類三種に一致するが、Ⅲ⑧Ⅲ⑩は第一類一Ⅲ三種に一致するため、いずれの系統の特徴

も有する。

IVは、第三類五種とほぼ一致するが（IV⑧のみ異なる）、IV⑧⑫が△なのは第二類の特徴である。

Vは東奥本が最も近い（V②⑩が異なる）。稲田は「全体の傾向からすると、第三類の二、三あたりの伝本に比較的近いが、②が×であるのは、第二類本と重なる」とし、前掲の結論を導き出している。

【表2】 伊地知文庫本の系統区分基準一覧

V	IV	III	II	I	
○	○	○	○	○	①
×	○	○	○	○	②
○	○	○	○	○	③
○	○	△	×	○	④
○	○	○	○	○	⑤
○	○	/	○	×	⑥
○	○		○	○	⑦
○	△	○	○	×	⑧
○	○	○	○	○	⑨
△	○	○	○	○	⑩
○	○	/	/	○	⑪
○	△			×	⑫
×	○	/	/	○	⑬
○	○			×	⑭
○	/	/	/	×	⑮
×				○	⑯
○	/	/	/	×	⑰
○				○	⑱
×	/	/	/	○	⑲
○				○	⑳
△	/	/	/	/	㉑
○					㉒
×	/	/	/	/	㉓
×					㉔
×	/	/	/	/	㉕
×					

V	IV	III	II	I	
○	/	/	/	/	㉖
△					㉗
×					㉘
○					㉙
×					㉚
○					㉛

早稲田大学
図書館所蔵 『草庵和歌集』 伝本の紹介

以上のように、多少第一類の傾向が見受けられるものの、稲田の報告の通り伊地知文庫本は第三類に近い本文を有すると言えよう。伊地知文庫本も早大本と同じく従来の区分の中に分類することは難しい。

最後に、早大本と伊地知文庫本の関係を見る。

I は一致率が高く、I ⑧⑪を除き同一である。I ⑧×のため、伊地知文庫本の方がやや第二類に近い。

II では早大本が第一類系統の本文、伊地知文庫本が第三類系統の本文であるのに対し、III では早大本が第三類系統の本文、伊地知文庫本の一部が第一類系統とそれぞれ異なる箇所第一類の痕跡を残す。

IV では早大本が第一―三類までのそれぞれの特徴を持つのに対し、伊地知文庫本は主として第三類だが第二類の特徴も合わせ持っている。

V では、早大本と最も近い本文を持つのは伊地知文庫本（残存部分まで）と考えられる（V ④⑥⑪が異なる）。伊地知文庫本からは東奥本が最も近いが（V ④⑥）、V ③⑪が誤写と思しき異同であることを加味すれば、早大本も東奥本と同程度一致する。

全体的には伊地知文庫本の方が第三類に近く、詞書・配列に関しては違いがあるものの、歌本文の有無・異同という点に関しては、二本は近い本文を有すると言える。

四 おわりに

以上、早稲田大学図書館が所蔵する二本の『草庵集』伝本の書誌を報告し奥書を考察するとともに、稲田論に導かれながら本文の検討を行った。

早大本は㉔・㉕奥書によって、文明八年に焼失した『草庵集』を家臣が所持していた伝本によって復元し、さらに

その本を三善之連が書写（あるいは所持）したものを十市遠忠が写したということが明らかになった。文明十六年以後のある種の伝本が取り合わせ本になっている点は、今後注意すべき問題点であろう。

また、その本文は東奥本に近いが従来区分では処理しきれず、早大本を奈辺に位置づけるかは確定し得ない。ただし、同じく東奥本に近い伊地知文庫本は歌本文の有無・異同に関しては早大本と近い関係にあると思しく、詞書・配列の差異を踏まえながら類似性を探ることは可能だろう。

ともあれ、この早大本は十市遠忠の手によって天文元年に書写された完本であるのみならず、他本に見られない奥書を有し、『草庵集』の伝来過程を考察する上で重要な情報を提供している。また、これまで『草庵集』伝本研究・禁裏本研究・十市遠忠研究のいずれの側からもその存在を指摘されておらず、極めて貴重かつ重要な写本と言えるのである。

注

- (1) 石田吉貞『頼阿・慶運』（三省堂 昭和18）、井上宗雄『中世歌壇史の研究 南北朝期』（明治書院 昭和40）〔改訂新版〕昭和62）などがあり、和歌文学大系『草庵集・兼好法師集・浄弁集・慶運集』（明治書院 平成16）、『草庵集』解説酒井茂幸執筆）に先行研究が整理されている。また、近年では小川剛生「百人一首の発見―頼阿から宗祇へ―」（就実大学吉備地方文化研究所編『人文知のトボス』和泉書院 平成30）が頼阿の出自について言及している。

- (2) 稲田利徳『「草庵和歌集」伝本考』（『和歌四天王の研究』第二章第一節 笠間書院 平成11）。以下、注記なく稲田論に言及する際は同論文に拠る。

- (3) 井上「十市遠忠について」（東京教育大学国語国文学会『言語と文藝』50 大修館書店 昭和42・1）。

- (4) 「之連」は「元連」とも解され、人物比定において説が分かれる。まず、萩谷朴が連歌師宗覚こと三善之連に擬し（『平安朝

歌合大成」、それを受けて井上は室町幕府奉行衆で武家歌人でもあった三善元連かと推定し（前掲注③井上同）、兼築信行は井上に従っている（早稲田大学蔵資料影印叢書『中世歌書集 一』（早稲田大学出版部 昭和62）所収『東山殿御時度々御会歌』『解題』。その後、石澤一志「鶴見大学図書館蔵『堀河院艶書合』（長享二年奥書本）について」（武井和人研究代表『中世後期南都蒐蔵古典籍の復元的研究』平成18・3）は問題点を整理した上で、連歌師宗覚とも三善元連とも異なる飯尾因幡守之連であろうと論じた。

「之連／元連」いずれの人物か比定しかねるが、本稿では石澤に従い「之連」とした。

- (5) ただし、第三類二種の陽明文庫本A（室町最末期ごろと目される）には「近衛殿御書」「年経ぬる」歌は記されていないため、近衛家伝来の本が親本と断定はできない。

- (6) 井上「文明前期の歌壇」（『中世歌壇史の研究 室町前期』第七章 風間書房 昭和36↓〔改訂新版〕昭和59）、酒井「文明期の禁裏における歌書の書写活動」（『禁裏本歌書の蔵書史的研究』第三章 思文閣出版 平成21）。

- (7) 小川「足利義尚の私家集蒐集」（『中世和歌史の研究』第三部第十章 塙書房 平成29）。

- (8) 木下聡「二階堂政行と摂津政親」（阿部猛編『中世政治史の研究』日本史史料研究会 平成22）。

- (9) 福田豊彦「室町幕府の奉公衆（一）——御番帳の作成年代を中心として——」（『室町幕府と国人一揆』I 二 吉川弘文館 平成7）に走衆として藤民部又三郎の名が見える。「政盛／政兼」と名前が分かれるが、ここでは「政盛」として論じる。なお、今谷明「『東山殿時代大名外様附』について——奉公衆の解体と再編——」（『室町幕府解体過程の研究』第2部第3章 岩波書店 昭和60）も「政盛」について言及している。

- (10) 河合正治「東山文化と武士階層」（『中世武家社会の研究』第六章 吉川弘文館 昭和48）。

- (11) 奥書本文は武井和人「十市遠忠書写伝領蒐蔵典籍集成稿」（『中世古典籍学序説』和泉書院 平成21）に拠った。

- (12) 早稲田大学図書館蔵『東山殿御時度々御会歌』（請求記号ハ4-6089、前掲注④（兼築同）の奥書にも「依遠忠御所望以祖父元連本／大永八年卯月上旬比頼令／書写之畢 右筆桑門栄暁」と記され、遠忠が三善之連書写本を蒐集していたことが知られる。

- (13) 遠忠筆の鑑定基準に関しては、武井「実践女子大学文芸資料研究所蔵手鑑『筆林』所掲「伝遠忠切」について——付（遠忠筆）

鑑定難——(前掲注11)武井著同)を参照した。ただし同論で武井が論じるように、遠忠周辺には遠忠と近似した筆跡(《遠忠様》と称される)の右筆がいて、ただちに遠忠筆であるかを鑑定することが困難であることを指摘している。

(14) ④「の」は同時代の近衛尚通、また鳥養流一般の書にも見られる筆致である。この書体のみでは遠忠筆とは判断しかねるが、遠忠筆の特徴の一つであることは疑われないため、①③と合わせ揭示した。前掲注(13)武井論文参照。

(15) 前掲注(2)稲田論文追補。

(16) 『和の史』(思文閣古書資料目録第254号 平成29・7)には、「本書は、第三類系統の第一種本(東奥義塾図書館本)に最も近似するものの、同系統二・三・四・八・九種本や第二類系統本と共通する部分も多く、その系統を細かく確定することは困難である」と記される。

【付記】 成稿にあたって武井和人氏、小川剛生氏、久保木秀夫氏、石澤一志氏よりご教示賜ったことを、記して御礼申し上げる。

(あない じゅん 大学院文学研究科博士後期課程)